

時の楔通信

第〆〇〇号

一九七八・十一

まえがき

「時の楔」通信の出現の契機は、「私」たちを包圍する関係性の切迫がうみだしたパンフ（時の楔）——ハ V 語：に關する資料集——が提起しつつある問題群を、時間性との格闘の中で持続的に展開していくとする過程が示している。

この通信の前身過程には大学斗争を媒介として持続してきた表現媒体、とりわけ五月三日の会通信があることは明らかであり、その二三号、二四号において、すでに「時の楔」通信への転位が、名称や時期は不確定ながらも予感されていたといえよう。

「私」たちは、五月三日の会通信が表現媒体として七〇年代に果してきた役割を十分に尊重しつつも、その発行にかかわってきた人々の主観的努力をはるかにこえた領域で発行の（不）可能性が深化していることを卒直に認めなければならぬ。七〇年代のはじめにおいて、処分と起訴の進行速度に應じて、問題を共に考えようとする人々がその意味を提起し（その読者が、決して、いわゆる五月

三日の会の会員だけでなく、想像を絶する、さまざまな領域に及んでいることを「私」たちは知っている）、いくつもの応用の武器となってきたが、現段階に至るこの数年間に、前述の方法での掲載・発行だけでは、情況の本質につき入ることが困難であることが明らかになりつつある。

これは、ハ資料Vの量的増大や多彩さ、という点からでなく、「私」たちを、ここまでつき動かしてきた大学斗争の世界（史）性がこの領域でも問いをつきつけてきている、という風にとらえかえす必要がある。ハ V（一）斗争にかかわりつつ持続してきたいくつもの自立的な表現媒体が可視的に終刊し廃刊の危機にさらされており、個々の発行者と読者も自らの位置や問題群の把握と追求の困難さの前に立ちすくんでいる。この危機は、七〇年代の現段階で深刻になっていくといえ、七〇年代性だけから発しているのではない。その意味と打開の方向を「私」たちは、さまざまな機会に提起してきたし、これからも提起していくであろう。しかし、だからといって、「私」たちに十分な見通し（方針のみならず発行費用や配布方法も）があるわけがなく、むしろ、他の、どの表現媒体にかかわる人よりも不確定であるとさえいえる。

「私」たちは、パンフや通信の発行が、それ自体としてプラスで